

どう考えてもたいして売れそうもない私の評論集を、こうして光文社こうぶんしゃが出してくれませんが、「あとがき」のかわりに、思いついたことをすこし書いてみます。

「口舌の徒」という言葉があります。口さきや筆さきばかり達者で、どんな勇敢なことでもどんな賢いことでも言ったり書いたりするが、実行のこれにともなわぬ者のことを軽蔑して言った言葉です。今の時代にはこれがひじょうにふえています。私などもその一人かもしれない。そうになると、さしあたりこの評論集も「口舌のわざくれ」の一つということになります。

現在二十四五歳ぐらいまでの、若い世代の諸君はごぞんじないことですが、第二次大戦中はもちろん、その戦争まえにしても、この日本では言論がじつに不自由でした。治安維持法はあつたし特高警察はあつたし、その他いろいろの恐ろしい法律や役所はあつたし、それに軍部や軍人がいたし、内務省や情報局の役人なども、ひとりひとりなんとなく恐ろしい存在だつたし、町会の役員や顔役などまでが、国民の言うことやすることにいちいち圧力をくわえることができたし、

事実くわえていました。人びとは、じつに自分の思うことの十分の一も口に出したり筆に書いたりはできなかつた。それは現在から、ほとんど想像することもできないような不自由さでした。

その実情を想像してもらうために、一例をあげるならば、たとえば現在総合雑誌といわれている雑誌類の、巻頭からはじまつて三四十ページまであたりにつていいる論文の大部分は、どういうわけだか私にはよくわかりませんが、ひどく急進的なものであつたり左翼的なものであつたりするのが通例ですが、そういう論文の一編を、もし戦争まえに発表していたならば、十中八九と言いたいが、十中十、その筆者は警察か憲兵隊につかまつてしまい、それをのせた雑誌の責任者もそれに似たような目にあつたでしょう。ウソだと思つたら、現在三十四五歳以上で、多少とも思想的なことのわかる人びとにきいてごらんなさい。

つまり現在三十四五歳以上の中年者で、多少とも思想的なことや社会的な方面に頭を突つこんできた人びとは、そういうひどい圧迫の波の下をくぐつてきた人たちだと言えます。

若い世代の諸君は、中年者を見るばあいには、そういうことも考慮に入れながら見てほしいと思う。そうすれば、中年者が何を言つていいるかが、いつそうよくわかり、中年者のすぐれた点も、同時に中年者のゆがんだ点やくだららない点も、諸君にさらによくわかつてもらえて、諸君と中年者とのあいだのミゾがせまくなるだろうと思うのです。

そのころにくらべると、現在はじつに言論が自由になつた。もちろん、なんにつけても自由と

いうものはよいものなので、現在の言論の自由はよいことです。それにまちがいはない。しかし、それと同時に、その言論がひどく無力になったことも事実であります。だれがどんなことを言つても書いても、それを他の人びとは、ちよつと立ちどまつて聞いたり読んだりして「なるほど、ちよいとうまいことを言う」と思うだけで、すぐ忘れてしまいます。そして自分々々が何かを實行しなければならぬときには、そのような言論とはつながりのない、別の動機や理由から実行するのです。すべての人がひとり残らずそうだとはいえないが、今のたいがいの人びとがそのようです。

言論を吐く側の人たちも、そのことはだいたい知つているようです。自分の説く理論や主張を、そのままに実行したりする人が世の中に実際にいるだろうとは思つていないようだ。なかには、そんな理論や主張をしているご当人自身が、自分の言つてゐることを実行してもいなければ実行する気もないのがあるくらいで、自分の言論が実行にうつされたばあいの責任など、思つてもみないでいろいろの説を吐くわけで、したがつて、きらくな気持でどんな説でも吐けるし、どんなに勇敢な論もブテるわけです。言論はますます立派になるが、それはちようど、手品使いが手品が上手になるようなもので、これを聞く側の人びとも、実行上の知恵としてはますますこれを軽んじることになつています。

つまり、言論を吐く側と、それを聞く側の芸で相寄り相助けて、言論を無力なものにしているわけです。どんなにえらそうな大学教授などが、どんなにカッコとなつて書いた論文でも、その

論文を読んで受けとる側の読者との関係においては、だいたい、一席のお笑いをしやべつて、聴衆のごきげんを取りむすぶ落語家とその聴衆との関係と同じようなことになってしまつてしまつてゐるのです。いや、落語ならばまだしも、ときに心から笑うことができたりするのだから、落語のほうがかまだましかもわからない。

もつとも、そういう大学教授なども、そういう議論を書いたりしやべつたりすることで、原稿料や講演料をかせいで、大学からくれる月給のたりないぶんの埋め合わせのアルバイトをしたことになるのだから、ご当人の役には多少たつてゐるわけで、そういう点から言えば、だれにも何の役にもたたないと言うのは言い過ぎかもしれない。……こんなことを書くと、ことがらを誇張して皮肉を飛ばしているように取る人があるかもしれませんが、これは誇張や皮肉ではありません。なぜなら、じつはこれは他人のことではなくて私自身にも当てはまることだからです。

私は大学教授ではありませんが、終戦後、劇作家という、もとからの本職を持つてゐるのに、ツイうつかりして評論を書きだしたりしたために、これについてはイヤというほどの塩をなめさせられてきているのです。ハッキリ言いますと、私の発表した言論は、ほとんどまつたく実際の効果はありませんでした。

前述のとおり、現在われわれが口で言つたり、新聞や雑誌などで発表しているような言論の百分の一の言論でも、戦争まえやもちろん戦争中に発表していたら、われわれはしばらくはいられたか、ばあいによつては殺されていたかもしれせん。

だからその時代には、よくよくのことでないかぎり、たいがいの人が何も言わなかつた。そのかわり、よくよくのことになれば、すぐれた人たちは、一身の危険を覚悟したうえで、あえて言い出したのです。ですから、その言論は力づよく、一世を傾聴させ、そして実際において人びとを動かした。……そういう関係にあつたと思うのです。

これは、戦争中や戦前の日本だけにかぎつたことではありません。ヒットラー治下のドイツや、ムッソリーニ治下のイタリアなどでもそうだったろうし、多少かたちはちがつても、現在のソビエト・ロシヤなどでもそうだし、また、マッカーシイズムの盛んなアメリカあたりでも、ある程度までそうだと思われまます。

ですから、ものは考えようで、言論が自由だということは言論の無力をひきおこすものだと言えるし、そして言論がこんなに無力だということは世の中が太平である証拠だとも言えます。

そういう点から言えば、今の日本は、それほど悪い国でもないかもしれないと思われまます。

少なくとも、他とくらべればです。つまり、吉田茂をバカか気がいであるかのようののしり批評しても、まだそのカドによつて投獄された評論家はひとりもない。ソビエトでマレンコフのことを、中国で毛沢東もうたくとうのことを、同じようにのしり批評したら、その人はどうなるだろう？ また、日本では公立の大学の教壇で、共産党員でもなんでもない大学教授が、公然とマルクシズムの理論を真理として講義しても、だれもとがめない。似たようなことをアメリカの大学教授がしたら、マッカーシイおよびその一党がこれをどんな目にあわすだろう。

日本は敗戦のけつか、つまりん国になつてしまつたことは事実です。それ自体としてはじつに愚かしい国になつてしまつた。しかしそれでも、まだ他にくらべれば、右のとおり、今のところ、なかなかのよい国だと言えなくはないのです。

妙な逆説になつてしまつたように聞えるが、しかし、妙はたしかに妙でも、逆説ではないのです。これらの自由が、どんなアヤフヤな不安定な条件にささえられて存在しているかをセンサクしないで、ともかくにも自由が、ことに言論の自由が、これだけ幅ひろく存在しているという事実だけから言うならば、現在の世界のたいがい国よりも日本は住みよい国であることはまちがいないらしい。世の中の太平のゆえに言論は無力になつたのとともに、言論がかくも無力になつてしまうほど世の中は太平なのであります。めでたいかぎりです。

では、「言論の自由」などとはなれて、今の日本および日本人の現状そのものは、どうでありましょうか？ これは、どうも、どういう見方をしても、あまりめでたいとは言えない。ばかりでなく、もしかすると、じつにひじょうにめでたくないのだという見方もあると思います。ピンからキリまでのすべてのことが、うまく行つているとは言えません。なかでもいちばんおもしろくないのは、すべてのことについての将来の見とおしが、ほとんどみな暗いという点でしょう。別の言葉で言うと、希望が持てないことです。希望が持てるような芽が現状の中に欠乏している点です。

将来への希望さえ持てれば、われわれは、現在の暗さや苦しさにたえることができるのですが、

それが持てなければ、現状の暗さ苦しさは実際の二倍にも三倍にも、われわれにこたえてきます。そして、こたえてきつつあるのが、現在の状態だと思うのです。これは、なんとかしなければなりません。なんとかして、われわれは希望が持てるようなところへ、一歩でも二歩でも出ぬけなければならぬ。

さて、しかし、その方法はあるか？ 方法はあるのです。一つだけでなく、三つでも四つでも二十でも五十でも百でもあります。方法だけならば。

毎日々々、毎月々々発行される新聞雑誌に発表される学者や評論家やその他識者といわれる賢人たちの意見を読んでみるがよい。また、講演会やラジオやテレビでそういう人たちのしやべる意見を聞いてみるがよい。どれ一つを取りあげて見ても、ひじょうに立派な意見であつたり、中ぐらいに立派な意見であつたりで、とるにたらない愚劣な意見はほとんどありません。そのなかの一つか二つに傾聴して、そこに言われたとおりにわれわれが考えることができ、そこに言われたとおりにわれわれが実行することができて、それに飽きるということがないならば、われわれは多かれ少なかれ希望の持てる道のほうへ近づくことができそうです。そういう名論卓説は、じつにじつに多数に、掃いて捨てるほどあります。

残念ながら、しかし、話はじゆんかんしてしまいます。名論卓説と言える言論はいくらでもあ
るが、さいしよに言つたとおり、それらの言論はわれわれの実行ということに関するかぎり今や無力であります。つまり、それらが名論であり卓説であるという性質を持つていただけでは、す

でにわれわれはそれを信用しないのです。信用しないから実行する気にはなれない。いろいろの複雑深刻な理由からわれわれは、そんなふうになつてしまつたのです。今さらどうにも仕方はありません。たいがいのことを聞かされても「利口ぶつてアゴタを叩いていやがら」であり「口やペンに税金がかからないと思いやがつて、きいたふうなノダゴトをならべるぜ」ということになります。

同時に、これも前記のとおり、学者や評論家その他の賢人たちの方でも、自分たちの論や説を読んだり聞いたりした人びとが、自分の言つたことを実行するだろうと信用などしていないのです。

必要なのは言論への信用の再建です。さて、しかしこれがなかなかむずかしいようです。どうすればよいか、私などにたいしてよい知恵は浮かびません。ただわずかに言えることは、言論は人間が吐くものですから、言論への信頼の確立または再建ということは、まずそれを吐く人間への信頼を出発点とする以外に方法がないだろうということです。

問題は、言論の内容として言われていることの是非善悪の以前に、その言論を吐いている論者が信頼できるかできないかにあります。それさえ信頼できれば、そこから進んでその論者の立論の是非善悪にわたつて、もしそれが是であり、善であると判断されたならば、その言論は実行の規準として信用してよいことになるでしょう。つまり、第一の問題は、まず論者の人間ということになります。さて、この判断がなかなかむずかしい。しかし私の考えによれば、それには一つの方法があります。

私を幼年時代に愛育してくれた祖母が私に向かつて、しじゅう、たれてくれた教訓があります。それは「人がどれくらいにえらいかを知るには、その人が他人とむすんだ約束をどれくらいによく守るかを見ることだ。十だけえらい人は十だけ約束を守る。百だけえらい人は百だけ約束を守る。三つだけしかえらない人は、三つだけしか約束を守らない。そのぎやくもそうだ。人を判断するばあいには、この物さしを忘れないようにしなさい。」というのであります。私はそのころから現在まで、この物さしをズーツと使つてきましたが、あらゆるばあいにこれは当りました。この物さしがくるつていると思つたことは一度もありません。だから、これをこのばあいも、人さまにもすすめます。ことに世の中のことに比較的経験の浅い若い諸君に、中年者の忠告の一つとして、これをすすめます。

あらゆる言論は主張であり意見であり主義であり意図であります。だから他との関係においては広い意味での約束だとみることができます。一つの言論を吐いておきながら、それを読む人間の側から理解もできなければ同感もできないところの理由や動機から、一人がつてにデタラメに、またはそのときどきの風の吹きまわし加減しだいで、その言論を取りかえたり、とんでもないところへ飛びうつらせたりすることは、すなわち約束を守らなかつたということなのです。そういう論者の人間はそれだけえらくない。言葉をかえて言えば信頼できないのです。そういう人が口先の先やペンの先だけで、どんなに賢そうな論を吐いても信用しないほうが無難です。

しかし、人が約束を守るか守らないかは、一定の期間その人を見ていないとわかりません。それに、口やペンのうまい人は、人をバカすことがよくあります。だから、現在の世の中でいろいろの発言をしている識者の言論や行動を五年間見守っていてごらんなさい。また、その人が言ったりしたこと五年まえまでさかのぼってしらべてごらんなさい。そうすれば、たいがいまちがいのない判断がくだせます。人間は、三月や半年はうまいことを言つて自分の正体をごまかしていることはできますが、どんなズルイ人間でも、五年十年とはごまかせないものです。年月というものは恐ろしい。五年十年の年月のあいだに、タテの姿として露呈する姿は、その人のホントの姿です。

過去から現在にわたつて、また現在から将来にわたつて、五年十年のあいだに、言うことやすることのあまりにグラグラかわる人は信頼しなくともよろしい。信頼しないほうがよろしい。どんな賢そうなことを言つても、そういう人間はあぶない。その反対の、五年十年と一貫性を持つて良いことを言つてきた人たちは信頼してもよい。信頼したほうがよい。……これが私の忠告です。

さしあたり、何かを論じている人があつたら、その人の戦前から戦中から戦争直後までさかのぼつてしらべてみることです。そのあいだ、一貫性のあることを言つたりしたりしてきた人ならば、その論にも傾聴してよろしい。そうでない人たちの言うことは、捨てておいて、かつてになんとも言わせておくことです。

こうすれば、言論への信用はしだいに再建され、口説の徒のひき起す害悪はいくらかのぞかれ、そして言論は多少ずつ力を回復して、われわれは言論という手段でもつて、多少ずつ希望の持つる現実を生みだして行くキツカケをつかむことができると思います、いかがでしょう？

底本.. 「日本及び日本人——抵抗のよりどころは何か」 光文社

1954 (昭和29) 年4月25日初版発行

入力.. 伊藤時也

校正.. 伊藤時也

2011 (平成23) 年3月11日